

それはそれとして、赤城信一医師が登場しているのには驚いた。小生好みで恐縮であるが、函館戦争に医師が三十数名参加しているが、夫々の詳細は不明であり、旧所属、経歴などの発掘がのぞまれている（小生だけが知らないのかもしれないが）。こういう中で「赤城信一」の研究は、今後の研究の拡がりを期待させるものであり、同様の意味で「斉藤龍安の周辺」も多くの史実を教えてくれている。意外であったのは、函館におけるロシア人医師に関する記事がほとんどないことで、ロシア人医師は日本人に接しなかったということであらうか。

第三の大項目、北海道における医療の専門化については、外科、小児科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、麻酔科、精神科の八分野について記述されている。各科の分科確立に到るまでの先人の歩みを中心となっているが、登場する個人の記載に少々片寄りがあるようにみえ、ここでは各科発達の課題と共に、疾患における北海道的な病像の変異などの記載があつても良かったと思う。

紙数がなくなつてしまつて、教育にまで言及出来なかつた。今後の注文として、女医の問題、齒科の問題をあげておきたい。

本書をひもどくことによつて、北方の地域医史の視点から全国的な視野にすすむ出発点を捕えられると思うので、各科の医師、医師以外の研究者に一読するようお奨めしたい。

(中西 淳朗)

〔北海道医史学研究会刊・札幌市中央区大通西六丁目（北海道医師会内）、電話〇一一—二三三—一四三三、一九九六年六月発行、A5判、三四四頁、非売品〕

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部編

『扁鵲倉公列伝』幻雲注の翻字と研究』

司馬遷は、ある時代に生きた人物を『史記』という歴史書に映すことによつて、永遠の命を与えたのであつた。ある時には、伝説上の人物にも命を与え、生き生きと私達にその時代の世界を見せてくれる。彼によつてとらえられた時空は、一つの完成した世界という印象を感じる。

司馬遷は『史記』の「自序」の中で、「正義を保持し、人に屈せず、おのれは時機を失わずして、功名を天下にたてた人びとについては、七十の列伝を作る」（小川環ら訳『史記列伝』）と、列伝をたてる意義を述べている。さらに、「扁鵲は、医学の処方なすもののおおもとである。術数をまもり、それを明らかにし、後世の順序を定めた。倉公は、また扁鵲に近い存在である。」と、この医学にかかわる二人の伝記を述べる理由を明らかにしている。

しかし、この「扁鵲倉公列伝」は古来難解であつた。今なお、この列伝の理解は完全ではない。小川らは『史記列伝』（岩波文庫）を翻訳するのに、「扁鵲倉公列伝」と「亀策列伝」は正確に訳しうる自信がないとして訳していない。

この難解な『史記・扁鵲倉公列伝』に、すでに詳細な註釈をほどこした人がいた。約五百年まえの室町時代の禅僧、月舟寿桂（一四六〇—一五二三）である。この註釈をほどこした原本が今日まで伝来している。すなわち国立歴史民俗博物館所蔵の国宝・南化本『史記』扁鵲倉公列伝である。

この書物はすでに、影印で利用しやすいものとなっている。（オリエント出版社『東洋医学善本叢書』）。しかし影影が、はっきりしないところがあったり、落丁があったり、また墨字のままであるから専門家以外には読みにくいものであった。

このたび、北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部のメンバーによって、墨書の部分の翻訳が行われ、さらに文献研究と伝記研究がされ、『扁鵲倉公列伝』幻雲注の翻訳と研究』として出版された。翻訳は周到に行われ、原書の雰囲気不失わぬものとなっている。また研究は、小曾戸洋「幻雲の医界における交友関係」宮川浩也「幻雲所引の『難経』について」「幻雲附票の『難経』註釈の引用状況」「存真環中図」—幻雲所引文からの検討」真柳誠「幻雲が引用した『東垣十書』」小曾戸洋「幻雲から道三へ」の六編である。附録に、江戸時代の嘉永二年に丹波元堅が南宋本を影印した『扁鵲倉公伝』を載せている。さらに索引も完備している。小林健二「存誠葉室刊影宋本『扁鵲倉公伝』一字索引」宮川浩也「『史記』扁鵲倉公伝幻雲附票所引書名及人名索引」の二編である。

この書物の最大の収穫は、翻訳にある。古文書のごとき難解な墨書の注解を、一つずつ翻訳し、典拠のあるものはそれ

ぞれの古文献で検証して、完成したものである。まさしく時間と努力と忍耐の集大成である。いくらかの部分について、墨書と翻訳を比べてみたがその完成度は高く、誤字を見つめることはできなかった。

多くの研究はすでに、医史学会などで発表されたものであるが、活字となってみるとその所論が明確となり、今後の研究に必ずおおきな影響を与えるものと考えられる。どの論文でも明らかにされることは、月舟寿桂すなわち幻雲の医学知識の豊富さであり、その文献学的方法論の確かさである。また佚伝の文献や、由来の異なる文献を、この書物から利用できることを明らかにした宮川や真柳の論文は、書誌学上の大きな成果である。小曾戸はこの時代の医学の流れを明らかにし、近世日本医学興隆の学術的・社会的背景についての多角度の視点からの研究の必要性を提言している。

索引の二点は有用である。小林の一字索引は、CDROMで発表された文献索引を基礎としている。その実用性からいえば、コンピュータを使ったCDROMの索引であるが、簡便性からいえばこの本である。宮川の索引はこの本を利用するには不可欠のものであり、この江戸以前に存在した書物の書誌学的調査には、力を発するものである。

この書物の内容から見れば、幻雲の注記こそ大切である。

その注記は、彼の時代の医学の状況をあらわし、また中国と日本、さらに書物の伝来や、禅宗の僧侶の医学知識までわかるものである。読後の印象を述べれば、この注記はどちらか

という臨牀に役立つ記事を多く引用している。たとえば、幻雲に少し遅れるが扁鵲と倉公の歴史考証に重点が置かれている浅井図南の『扁鵲倉公列伝割解』などくらべての話である。この二本を用いて、『扁鵲倉公列伝』を読むと、ある程度は理解できるのではないかと思われる。

しかし幻雲をして「倉公伝」の文章は詰屈、句説を分け難い」と言わしめている。とくに近年の中国の注釈はあてにならない。いまこの書物が出版されたことよって新たな『扁鵲倉公列伝』の研究が始まる。

本書は文部省平成6年度～7年度科学研究補助金一般研究(C)、研究課題番号06807175「国宝・上杉本『史記』扁鵲倉公伝における月舟寿桂注の医史学的研究」(研究代表者・小曾戸洋)の研究報告書である。

(猪飼 祥夫)

〔北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所編・東京都港区白金五―九―一、電話〇三―三四四―六一六一、一九九六年三月発行、A4判、二五五頁、非売品〕

現代語訳・注記・解題、松尾信一ほか

日本農書全集第六十巻『畜産・獣医』

日本農書全集の編纂は全七十二巻から構成されているが、その六十巻に『畜産・獣医』が登場している。

獣医史学の研究も他の史学分野と同様に、ますます細分化されて追究される傾向にある。本全集の執筆者はいずれも獣医史研究者として著名であり、テーマが近世江戸時代におかれているため、その資料の選択にも興味のもたれた処であったが、次の文献資料から収録組立てられている。

(い) 小鳥の部『鶉書』慶安二(一六四九)年刊行、蘇生堂主人著 (ろ) 犬の部『犬狗養畜伝』天保七(一七二二)年、晚鐘成著 (は) 馬の部『厩作附飼方之次第』近世後期の出版、著者未詳 (に) 牛の部『牛書』中国から渡来した原本の写しによって、延享元(一七四四)年頃製本されたが、作者は未詳 (ほ) 馬の部『安西流馬医巻物』宝永七(一七一〇)年刊行、安西播磨守著 (へ) 馬の部『万病馬療鍼灸撮要』宝曆十(一七六〇)年初版、平安隠士、泥道人著 (と) 馬の部『解馬新書』嘉永五(一八五二)年、菊池東水著の七編である。

さらにこれらの底本のすべてに対して、執筆者の配慮にもとづく懇切で分りやすい現代語訳、注記、人物伝、豊富な図版等が付されているので、その紙幅は原書をはるかに越える量となり、解題の部だけを採りあげても、独立した参考書として組立てられているのが特徴である。したがって獣医史専攻でない私にも、江戸時代に刊行された代表的獣医、畜産書また動物図絵等を学ぶことが可能となり有意義であった。たとえば巻頭に記載されている底本に関連する珍らしい資料写真の数々、原書の漢文体に対する現代語訳の調査のとれた配置など、読者の目を思いはかる収録方法といえよう。